

京鹿の子絞

【産地組合】京鹿の子絞振興協同組合

（産地紹介）

絞り染めは、日本では千数百年も前から行われており、宮廷衣装の紋様表現として用いられてきました。括（くく）りの模様が子鹿の斑点に似ているところから「鹿の子絞り」と言われます。室町時代から江戸時代初期にかけて、辻が花染として盛んに行われるようになり、江戸時代中期には、鹿の子絞りの全盛期を迎えました。その後も手先の技は着実に受け継がれて来ています。



絞り染めの中でも鹿の子と言われる疋田絞（ひったしぼり）、一目絞（ひとめしぼり）の、その括り粒の精緻さや、括りによる独特の立体感の表現は、他に類のないものです。この他、それぞれの括り技法の持つ表現力を組み合わせて、模様が表現されています。

また、絞り染めの特徴である模様表現の柔らかさや優しさは、現代の生活空間に潤いと安らぎを与えるものとして、インテリア製品等に広く活用されています。